

「早う持つて歸にくされ、愚圖々々仕てくさつたら煮湯を浴せるぞ」

「ウワ、、、歸にますく……腹がドカ空りや、オホ、、、」

「オイ喜イ公泣いてるな、どうした」

「ウム万さんか、さつぱりわやや、飯が喰へん」

「ホウ、どこぞ悪いのか」

「達者で飯が喰へん」

「どうしたんや」

「今朝からお城の堀に乙姫さんが出ると聞いて見に行たり、天神橋へ鯨を見に行て腹が空や、家へ歸んだら飯を喰ふにも米が無い、米を買ふにも錢が無い、家の奴の智恵で隣の源さんに錢三十錢借つて家主さんの若旦那がお嫁を貰ひはつた先方ははりてやさかひ五十錢お祝儀が入る、そうしたら源さんに三十錢返して残つた二十錢で米と漬物を買ふてと、云ふので持つて行つたんやがあかん。

お前は阿呆や、嫁はんは賢い、鮑の貝の片跛、双方揃うて居んといかんと突返しよつた、此の通り米を入れる袋を持つてるね、婢は釜の下焚き附けて待つとをる、アー飯が喰へん」

「可哀想に、大概解つてる、お前所のお咲さんの智恵で家主へ麥飯で鯉釣に遣つたんやな」

「違ふ、生貝で五十錢釣に行つたんや」

「それを麥飯で鯉と云ふのや、そら先方が知りよらん、先方は鮑の貝の片思ひ、兩思ひやないと不縁の基とこう云ふたんやろ」

「お前立聞き仕てたな」

「阿呆云へ、そら先方が物知らんのや、モウーペン持つて行き」

「今度行つたら煮湯浴せられる」

「氣遣いあらへん、俺が尻を利いたる、ビクく仕てたらあかん、ボンく云ふたれ、鉢巻でも仕て尻からげを仕て行け」

「甚い事仕て行くねんな」

「ゴテくなしに取ときなんせと喰はせ、構へん。先方は品物でも替て來たのか知らんと思ふて開けて見よる、これは今の生貝やないか、私所の家になんぞ恨みでもあつてこんな物を持つて來てやつたかと云ひよる、そこで遠慮すな、己れ所の下息子に下婢を貰ひさらしたやろと」

「甚い穢う云ふねんな」

「ハイ嫁を貰ひました。祝を貰ひさらすやろ、先方は交際が廣いよつてに仰山祝が來るに違ひない、祝を貰ふたら祝に附いて來る鬨斗を剝つて返すかと云へ、減多に剝つて返すと云はん、貰るとくと云ひよつたら鬨斗の根本を知つてるかいと云ふたれ」